

解読者を求めて

——『行け、モーセ』のアイザックの場合

植野達郎

七つの短編と中編小説からなる『行け、モーセ』は当初、フォークナーの意図とは別に短編小説集として出版されたことからもうかがえるように、従来の長編小説とは多分に趣が異なる作品である。アイザック・マクキャスリンをめぐる物語である「昔の人たち」「熊」「デルタの秋」をアーサー・キニーは「大森林三部作」と称しているとマッシュューズは紹介している。⁽¹⁾確かに時代の推移や変化が大森林の喪失に表わされていることが鮮やかに描かれている。と同時に、その変化を目のあたりにして見つめているのがアイザックである。とするならば、巻頭を飾る「昔あった話」にアイザックが登場していることをあわせて考える時、「大森林三部作」は大森林にまつわる物語というよりはアイザックの物語と言うべきではないのだろうか。

「昔あった話」では、マクキャスリン家の長男として農園を相続することになっているアイザック・マクキャスリンに、16歳年上の従兄であるキャス（キャロザーズ・マクキャスリン・エドモンズ）がアイザックが生まれる前のエピソードを語っている。キャスがアイザックに語る話とは、ビーチャンプ家のテニーと会うためにマクキャスリン家を抜け出し、ビーチャンプ家へと向かったマクキャスリン家の奴隷であるトミーのタールを捕えるという話、それに関連してトミーのタールを追ってビーチャンプ家に出向いたシオフィラス・マクキャスリン、すなわちバック叔父がソフォンシバ・ビーチャンプに捕らえられる話、さらにそこに持参金とテニーを買い取ることをめぐって行われるポーカーの話である。この「昔あった話」自体は、ジョン・マッシュューズが述べているように、「疑う余地なく、フォークナーの短編小説の中でももっとも滑稽な話である」⁽²⁾と言えようが、しかし、それは単に面白く、おかしいという意味での滑稽な話ではなく、苦さと暗さが緋い交ぜになった滑稽な話ではないのか。

というのも、やがて明らかになるのであるが、トミーのタールはアイザックの祖父である老キャロザーズが奴隷のユニースとの間にもうけたトマシナに生ませた子供なのである。とすると、白人の母から生まれた兄であるバック叔父が、黒人の母を持つとはいえ父は同じである弟のトミーのタールを犬を放って捕えようとするようになる。この時、バック叔父は少なくとも60歳であり、それまでに何度となくマッキヤスリン荘園の台帳を手にはしていたはずであり、トミーのタールが異母弟であることを知っていたと思われる。そのバック叔父がトミーのタールに犬を放って捕えようとするのは、南部社会においては血のつながりよりは、白人であることと黒人であることの人種の違いの厳しさを余すところなく示している。と同時に、トミーのタールがテニーに会うためにビーチャンプ家へと逃げ出し、彼を追うバック叔父が家につしかなないネクタイを締めていくことは、バック叔父は表面的な言動はともあれ、心の中ではソフォンシバと会うことを心待ちにしていたことを物語ってはいないだろうか。

バック叔父の言動には直接表れないが、ソフォンシバに対する心情がうかがえるのが、バック叔父がソフォンシバに捕われる場面である。夜になってトミーのタール追跡が一端打ち切れ、バック叔父とキャスはビーチャンプの家へ行く。バック叔父はキャスに「未婚の女性は家の中に他所の人がいるときには間違いなくドアの鍵をかけているものだ」と言って、鍵の掛かっていない部屋に入るが、不思議なことに「静かにするのだ」とキャスに囁くように言い、「ベッドの端に注意深く腰をおろして」⁽³⁾ズボンを脱ぐのであった。この矛盾した言動は「少なくとも潜在意識としては、偶然にではあれ、最後は彼女のベッドに入ることを心に抱いているに違いない」⁽⁴⁾という指摘を待つまでもなく、バック叔父はソフォンシバに捕えられることを覚悟しているとともに、捕えられることを期待してもいたのであろう。ただし、バック叔父がソフォンシバに捕えられるこのエピソードは1859年に起きたものだったが、結婚したのが南北戦争を挟んでいたとしても1865年から1866年にかけてであったとするならば⁽⁵⁾、バック叔父は60歳後半になっている。結婚を遅らせた理由は明らかにされてはいないが、そこには老キャロザーズの血を断とうというバック叔父の意図が隠れてはいないだろうか。バック叔父がソフォンシバに捕えられるまで双子の兄弟であるパディ叔父とともに結婚することなく二人で暮らしてきたのは、老キャロザーズの道義に悖る行為に対する暗黙の異議申し立てではなかったか。老キャロザーズが遺したものを受

け継いだバック叔父とパディ叔父は、奴隷たちを夜間は自由にさせてはいたものの、結果としては老キャロザーズの遺産に対しては積極的に変更を加えることはなかったのである。バック叔父がソフォンシバに捕えられ、アイザックが誕生したことは、老キャロザーズの遺産は無条件に時の経過に委ねるわけにはいかないことが暗黙裡に了解されているのではないだろうか。バック叔父にしてみれば、アイザックの誕生はもろ手を挙げて祝福すべき事柄であるというよりは、老キャロザーズの負の遺産が次の世代に先送りされたことを意味している。とするならば、アイザックは生まれ落ちた時に、父親のバック叔父とは異なる形でマッキヤスリン農園を引き受けることが想定されているのである。

「昔あった話」において示されているように、バック叔父がソフォンシバに捕われる経緯をキャスから聞かされるアイザックは、マッキヤスリン家の歴史が記載されている台帳を見るまではこの上もなく滑稽な話として聞くことができたかもしれない。しかしマッキヤスリン家の歴史を知った上で、キャスから聞かされた話を思い起こすとすれば、バック叔父がソフォンシバに捕われる経緯が滑稽であればある程、苦さは否応なく増さざるを得ない。マシューズが示唆しているように、「キャスを『彼』と呼ぶ声はアイザックの声であり、彼はキャスの話を受け入れざるを得なかったのであり、その話を自分のものとして語るのである」⁽⁶⁾とするならば、引き受けることを期待されている老キャロザーズの行為を含むマッキヤスリン家の歴史が抱え込んでいる哀しさ、切なさ、そして暗さに思いを馳せる時、アイザックならずとも暗澹たる気持ちにならざるを得ないのである。

アイザックがキャスから聞かされた話を「昔あった話」として語るとき、それは単に現在とは切り離された昔の話ではなく、まさに現在のアイザックをアイザックたらしめているものなのである。しかしながら、「昔あった話」を現在の話として理解するためには、「熊」第四部における台帳を前にしてのキャスとアイザックの農園放棄をめぐる話し合いが必要であるのみならず、アイザックの農園放棄は「昔の人たち」で示されるサム・ファーザーズから森の狩人になるための手ほどきを受けたアイザックが大森林で鹿を倒すという人生入門、および「熊」の第一部から第三部にかけてのオールド・ベンをめぐる物語が必要だったのだ。「昔あった話」がキャスから聞かされた話をアイザックが自分のものとして語っているとすれば、そこには一度ならず思い起こさざるを得ない事柄があるはずである。それは一つにはアイザック

の誕生をめぐる経緯であるだろうし、もう一つは老キャロザーズの血をひくトミーのタールに纏わる白人と黒人という人種の問題をめぐる事柄であろう。一見すると無関係に思えるこの二つの事柄は、老キャロザーズを媒介させると根は共通していることがわかるのである。

アイザックが3歳頃にバック叔父、次いでバディ叔父が亡くなり、16歳年上のキャスが父親の代理となる。しかし、10歳から12歳頃にかけての実質的な父親はサム・ファーザーズであった。アイザックはサムを師として大森林へと入っていき、狩人として成長していく。アイザックはサムから狩人になるために必要なことを学んだのだが、学んだことはそれに止まらなかった。サムが昔のことや、「少年が知っているどちらの人種とも違う別の人種の死んでしまい、消えてしまった男たち」について話すのを聞いていると、「彼の人種の誰一人として、さらに彼の同族がこの土地に連れてきたもう一つの隷属している人種もまだここにはやってきてはいない」(171) 時代を、あたかも実在するかのように眼前に思い浮かべるのである。荒野が荒野であった時代から、白人や黒人が現れて荒野が人間によって浸食されていく過程を少年なりに理解する。その理解の仕方は、マッキヤスリン家のものとは異なるサムの話、すなわち、死んでしまい、消えてしまった男たちの悲しみに触発された理解であった。アイザックは、「この土地は、実際には彼らのものとして記録しているジェファソンの衡平裁判所の台帳に書かれた・・・手書きの字と同じように、取るに足りない、現実性を持たないものにほかならない」(171) といった思いに捉われるのである。サムの話は、アイザック少年を幻視に誘うほどの現実感を抱かせる。

サムの話を書くことによって得た白人種とは異なる人々の土地に関する理解は大きな意味を持つ。アイザックは、マッキヤスリン家の男系の息子であり、世襲財産としての農園を受け継ぐ運命にあるからだ。農園を受け継ぐことは、その農園に纏わる事柄のみならず、そこに居住する人々をも引き受けることでもある。すなわち、老キャロザーズが農園を手に入れた経緯、奴隷として買ったユニスとの間に生まれた娘であるトマシナと関係を持ち、トミーのタールを生んだこと、さらには老キャロザーズがトマシナと関係を持ったことを知ったことによりユニスが入水自殺したこと、そして老キャロザーズがトミーのタールの子供たちそれぞれに残した千ドルの遺産のこと、このような事柄をも引き受けることである。

農園の相続者であるアイザックが18歳の時、トミーのタールの子供である

テニーのジムが21歳になるとともに農園を出て行った。アイザックは老キャロザーズの遺言に従い、千ドルを渡そうと彼の後を追うのだが会うことはできなかった。もう一人の子供であるフォンシバがキャスに結婚を報告して立ち去った時、アイザックは彼女を追いかけてアーカンソーまで行ったものの、「わたしは自由です」(280)と遺産の受け取りを拒まれる。それでもアイザックは遺言の千ドルを土地の銀行に預け、月3ドルを彼女に渡す取り決めを結ぶのである。遺言を執行しなければならないという思いに捉われていたアイザックは、テニーのジムが農園を出て行った理由も、またフォンシバが自由を旗印にして遺産を望まない理由を忖度することもできなかったであろうし、理解しようとすらしなかったであろう。というのも、16歳のアイザックは台帳を前にして、老キャロザーズがトミーのタールの子供たちに遺した千ドルの遺言について、「彼の息子たちが父親としての資格を欠いているが故に現金の罰金を科した」とか、「千ドルの金の方が黒んぼに向かって我が子よと言うよりは安くついたからだと思う」(269)と考えをめぐらす。このように金銭で解決するものとして老キャロザーズの行為を理解しようとするアイザックは、結局、老キャロザーズの思考をなぞっているにすぎないことが露呈するのである。だからではないのか、フォンシバに対する遺産の渡し方にしても、月3ドルずつであれば28年間は払われることになる、アイザックにしてみれば、その場で取りうる最良と思える方策を講じて帰ってくるのである。

トミーのタールの子供たちに対する老キャロザーズの遺言を執拗に執行しようとしたアイザックが21歳になると、老キャロザーズから遺されたものをすべて投げ出すかのような行動を取る。生得権を放棄して、マッキヤスリン農園をキャスに譲るというのである。「熊」の第四部で交わされるマッキヤスリン農園の相続拒否をめぐるアイザックとキャスの対話は、圧巻であるとともに難解である。サンドキストが「アイクの拒否の開示が内包するスタイルの複雑さは、頻出するあやふやな結末や非論理的な議論のために、まったく用意周到に当の拒否の意味を不明瞭にする」⁽⁷⁾と述べているように、農園相続を拒否するに際して、キャスにその理由を説明するアイザックの論旨は明確な結論を持つこともなく、キャスを納得させることもできない。たとえば、アイザックはマッキヤスリン農園という土地を拒否することはできないと言う。なぜならば、「イッケモテツベが土地をお金と引き換えに売ることができることを発見し、認識した瞬間、その瞬間にその土地は彼のものであつ

たことを永遠にやめたのであり、それゆえその土地を買った人は何も買わなかったことになる」(257) からであり、イッケモテユッベから土地を買い入れた老キャロザーズは土地を手にしていなかったし、そうであるとすれば老キャロザーズの孫であるアイザックはそもそも土地を手していないのだから拒否することができないと言うのである。

アイザックが土地を金と交換することができる対象であることを否定するということは、「論理的には資本主義に対する批判を行っている」⁽⁸⁾とも言えるのであるが、問うべきはアイザックの相続放棄の論理に包含される事柄よりは、相続放棄を選択しなければならなかったアイザックの心情であろう。というのも、キャストの対話において、「もしも真実が僕とあなたにとってそれぞれ別のものであるとするならば、どちらが真実なのかをどうやって選べばいいのか、とあなたは言いたいのでしょうか。選択する必要はないのです。心はすでに知っているのです・・・真実はただ一つしかなく、その真実は心を動かすあらゆるものを蔽うのです」(260) と、アイザックは論理ではなく、心あるいは心情の優位性を主張する。自分の行為を説明するに際し、論理ではなく心情をもって理解を求めること、それは取りも直さずアイザックが説明に窮していることを物語ってはいないだろうか。

説明に窮する行為とは、社会的な常識から逸脱していることは十二分に承知していながらも、それを選び取る覚悟を固めたことであるとともに、その前代未聞の決断に至った過程の一部なりとも伝えたい、何とか言葉にしたいとする苦渋に満ちた行為ではないのか。農園に居住する者であれば農園を相続するのは21歳になるアイザックであると認めているにもかかわらず⁽⁹⁾、その相続を拒否しようとするアイザックの行為はまさに理解しがたいものである。相続拒否の契機となったのが、1883年から84年にかけてマッキヤスリン農園に関する台帳を読んだことである。その台帳には、農園に出入りするすべての品物や人物に纏わる記録が記載されている。その記録の中でも、アイザックに衝撃を与えた事柄が、老キャロザーズが奴隷女のユーニスとの間にできた娘トマシナと関係を結び、その結果としてユーニスが入水自殺したことであることは想像に難くない。というのも、アイザックは、トマシナが子供を産む六か月前のクリスマスに、「孤独で、決然として、悲しみもなく、儀式を執り行うように、すでに信念と希望を拒否しなければならなかったのだが、今は正当に、そして簡潔明瞭に悲哀と絶望を拒否して」(271) 死んでいくユーニスを思い浮かべるからである。アイザックの胸中に浮かんだもの

は、一人の人間として失くしてはならないものを身を以て示したユースの矜持であったのだ。⁽¹⁰⁾ 老キャロザーズとトマシナの間にできた子が「昔あった話」に登場したトミーのタールであり、その子供が農園に住んでいるアイザックの7歳年下のルーカスである。マッキヤスリン農園を相続することは、マッキヤスリン農園の土地だけでなく、農園に纏わるおぞましい過去をも引き受けることなのである。⁽¹¹⁾

アイザックは農園相続を拒否する。相続の拒否に直接影響を与えたのが、16歳の時に台帳を読みこんだことにあるとすれば、その読みこみ方に間接的に影響を及ぼしたのが「昔の人たち」と「熊」に登場するチカソー族酋長の血と黒人の血を引くサム・ファーザーズである。毎年11月になると、ド・スペイン少佐を始めとしてコンブソン將軍、アイザックの従兄のキャス、アッシュ、ユーウェル、サム・ファーザーズなど、町の主だった人々が荒野に狩りに出かけていく。アイザック少年も10歳になると狩りに行く一行に加わることが許され、狩りの手ほどきをサムから受ける。狩りに出かける荒野とは「鋤と斧を持った人間によって、絶えず、ほんの少しずつその縁を齧りとられていく宿命づけられた荒野であり、人間はそれが荒野であるがゆえに荒野を恐れる」(193) といったように、荒野とは人間を凌駕する存在であり、いわば異界であった。荒野という異界では、町とは異なる、狩人としての行動様式を取ることが必要である。アイザックはサムを師として、誰にも劣ることのない狩人になっていく。そして初めて鹿を仕留めた時、その鹿の血をサムによって顔に塗られることで、狩人としての入門を果たすのである。しかし、サムがアイザックに教えたのは狩人になるための術だけではなく、その消え失せ、忘れ去られた種族から受け継いできた何か大事なものでもって印をつけてくれたことを悟った」(182) のである。その大事なものとは、荒野に共に狩りに出かけた町の主だった人々が当然と見なしてきたこととは相容れないもの、すなわち、自然と共に生きることを徹底することではなかったのか。そのことの具体的な表現として、アイザックは土地の私有化を拒否したのではないだろうか。制度としての土地の私有化に対する異議申し立てではなく、少なくともサムから受け継いだ大事なものを自分なりに受け止めた結果として。

荒野という異界に足を踏み入れるアイザックは、町では味わうことができない高揚感、緊張感、充実感に包まれ、それこそ身体が震える思いをした。

特に、オールド・ベンとの邂逅については、まさにサムの弟子としてのアイザックだからこそ果たせたのである。アイザックがオールド・ベンに遭遇する過程は、緊張感を孕んだ感動的な体験であることは疑念の余地がない。しかしながら、そこにはある種のアイロニーが伴っていることを忘れてはならないだろう。アイザックはオールド・ベンと出会うためには銃を置いてきただけでは十分ではなく、「時計と磁石のせいだったのだ。まだ汚れていたのだ」(208)と思い、時計の鎖と輪になった磁石の革紐を外した。森の中で道に迷ったあげく、一筋の陽光に触れて輝いている外した磁石と時計があるところに戻った時、オールド・ベンとの出会いを果たすのである。サムの教えを忠実に守り、実行するアイザックは一流の狩人であるにしても、荒野に移り住んだサムとは違い、町に住む人間であり、荒野は狩りに出かけていく非日常的な場所である。ここに、アイザックが抱える矛盾が集約されていると言えるだろう。そうであるにしても、荒野における体験はアイザックの身体に深く根を下ろし、原体験となるのである。

しかしながら、荒野における体験が原体験となったアイザックは、逆に困難な立場に立つことになる。荒野とは熊、鹿、ウサギ、リスなどの動物が生息し、時期が限られているとはいえ、誰でもが狩りをする場であるという意味では、ある種の共有地である。狩人として荒野に対して高揚感を抱くとともに、人間を凌駕するものとして畏怖の念を抱くアイザックは、荒野に軸足を置くことによってマッキヤスリン農園を拒否する立場を取るのである。もしも、アイザックが荒野に視点を置いて町の生活を考慮する姿勢を貫徹したならば、現在のエコロジー思想に通じる根本的な問題提起が可能であったかもしれない。しかし、アイザックは荒野の存在を無条件に前提している。たとえば、キャスが12歳の時に材木運搬機関車に怯えた熊が木に登ったまま下りてこないエピソードが語られるが、これはアイザックが生まれる前の出来事であったとはいえ、荒野がすでに人間に浸食されていて、荒野に住む動物が生活空間を脅かされていることを示している。それゆえ「その頃は害がなかった」(319, 320)というアイザックの判断は、あまりにナイーブであると言わざるを得ない。

荒野の動物たちは居住空間が狭まるにつれ、人間の生活空間に食べ物を求めて姿を現すし、現わさざるを得ない。ド・スペイン少佐の家畜小屋の仔馬がオールド・ベンに殺された時、少佐が「わしはあいつに失望した。掟を破ったのだから」(213-214)とオールド・ベンを非難するが、その非難は筋違い

である。人間世界に姿を現す原因を作ったのは人間にほかならない。さらに言えば、少佐が言う掟を作ったのは人間であり、掟の存在については、そもそも動物の与り知らぬことである。アイザックは荒野の存在を前提としてものを考えようとするが、荒野の存立が常に危険に曝されていることを認識していないようである。

荒野の存立が危ういことを如実に語っているのが、オールド・ベンが倒され、サムが亡くなると、ド・スペイン少佐は森の伐採の権利をメンフィスの会社に売り渡したことである。それを契機に少佐は狩りに出かけることを止め、ただ儀礼としてアイザックにリスを所望する。少佐の要求を受け入れるアイザックは、少佐に代表される町の論理、あるいは経済の論理を認め、受け入れているかのようである。伐採の権利が売り渡された結果として、伐採が加速度的に進み、荒野は急速に衰退していく。かつては、ジェファソンから荒野まで30マイルであったのが、アイザックが80歳に近い年齢のときには200マイルも離れてしまうのである。この現実に対してアイザックは「荒野が征服され、破壊されるのではなく、今ではその目的が果たされ、その時が時代遅れになったがゆえに退いていくのを見つめてきた」(343)と述懐する。アイザックが考える荒野の目的とは何なのだろうか。荒野がアイザック個人を作り上げたという意味であればその目的は果たされたのであろう。サムは「彼の精神の父であったし・・・森は彼の恋人であり、彼の妻であるだろう」(326)と考えるアイザックは、荒野によって育てられ、荒野とともに成長したという認識はその通りであろう。しかし、森が退いていくのを見つめることしかないアイザックは批判を免れないだろう。アイザックは森を私物化していることになるからである。さらに、荒野における時間が時代遅れになったという認識も単に現状を黙認しているにすぎない。効率を優先する現代社会の要請を無批判に受け入れている。アイザックの荒野に対する認識は、荒野に軸足を置いた人間のものではなく、文明化された社会のものである。アイザックの荒野に対する述懐は根本的に矛盾を孕んだものである。

アイザックが認識していない根本的な矛盾は、「デルタの秋」において、ロス・エドモンズの女であると同時にテニーのジムの孫娘から鋭く指摘される。ロスから女に金を渡すように頼まれたアイザックは言われた通りに女と会い、金を渡そうとする。アイザックが女に金を渡そうとする行為は、テニーのジムおよびフォンシバに老キャロザーズの遺言を執行しようとしたことの反復である。ロスの女は金が問題ではないことをアイザックに知らせるとと

もに、彼女はテニーのジムの孫であることを打ち明けるのである。黒人とは思えない外見をしている女が、ロスとの間にできた子供を抱いて現れたとき、老キャロザーズの悪と恥辱が消え去ったのではなく、繰り返されたことをアイザックは知る。「1888年に大人になり、相続を振り棄て、拒否して、自由になり・・・1895年に誰一人として自由になったものはいないし、もし自由になれば、恐らく耐えることはできないだろうということがわかった」(281)と考えるアイザックは、相続を放棄することによって問題が解決されなかったという認識を得たのであるが、それに止まることなく、相続を拒否したアイザックの責任を女は問うのである。すなわち「わたしはあの人を一人前の男にしようとした。まだ一人前の男になっていなかったから。あなたが甘やかしたからよ。あなたと、ルーカス叔父とモリー叔母が。特にあなたがね・・・あなたがあの人のおじいさんにあの土地をあげたからよ。遺言によっても、法律によっても半分もあの人のもんでもないのに」(360)と、土地の相続を拒否しただけでなく、その土地をエドモンズ家に渡したことの不当性を問うのである。

土地をキャスに譲ったことに対する非難の当否は別にしても、アイザックは認識していないのだが、相続を拒否したことと、その土地をエドモンズ家に渡したことの間の連関性が欠除していることを、ロスの女は鋭く突いているのである。アイザックは土地を拒否した理由について、「少なくともその悪と恥辱を、少なくとも主義として、そして事実上少なくともその土地を、少なくとも自分の息子のために振り棄てることができることを知った。そして実際に振り棄てた。振り棄てたと思ったのだ・・・あの同じ土地、あの同じ悪と恥辱の悲哀や悲嘆から自分の息子を救い、自由にしようと思い、そして自分の息子を救い、自由にすると同時に失った」(351)と、過去を振り返りつつ、自らの行動の意図と結果を吐露している。サンドキストは「アイザックの生まれることのなかった息子は、最良の解決策であると同時に、その恐るべき対極をなしているように思える可能性を規定する。アイクの拒否はこのパラドックスに依存している」⁽¹²⁾と、アイザックが置かれている状況の困難さを指摘している。アイザックはマッキヤスリン農園で行われた悪と恥辱に立ち向かうことをせずに、土地を拒否することで振り棄て、悪と恥辱の悲哀や悲嘆から逃れることができると考えたのだが、その悪と恥辱はエドモンズに引き継がれただけなのだ。

アイザックが陥っている困難な状況は何に由来しているのだろうか。それ

はキャスから聞いたアイザックの誕生に纏わる話を自ら語ることに示されているのだが、アイザック自身の誕生の経緯にはマッキヤスリン農園の歴史が影を落としているのだ。アイザック個人の行動は、彼一人の行動として完結することはないのである。そのことが端的に示されているのが台帳に記載されているマッキヤスリン農園の歴史である。すなわち、「この年代記録は一つの土地全体の縮図であり、それを倍加し、繋ぎ合わせると降伏後23年経ち、奴隷解放後24年経った南部全体の姿となる」(293)のである。つまり、マッキヤスリン農園に関することは、単に一農園の特殊な出来事ではなく、南部全体にも適用されうるものなのである。アイザックの問題はアイザック個人の問題であるとともに、優れて共同体の問題でもあるのだ。アイザックが認識することがなったのは、歴史的存在としてのアイザックであり、そのことをロスの女は告発したのである。

歴史的存在としての自己を認識しないアイザックはロスの女の告発を受けとめることができない。北部で育ち、自立したロスの女と、南部の荒野に寄り添ってきたアイザックとの間に共通理解は生まれえないかのようなのである。それが端的に表わされているのが、アイザックが女に「北部に戻りなさい。結婚しなさい。あなたの人種の男と」と、心ないと思える言葉を口にしたことである。それに対して女は「おじいさん、あなたはあまりに長生きしすぎて、あまりに多くのことを忘れてしまったので、あなたがかつて愛について知っていたり、感じたり、さらには耳にしたことも、まったく覚えていないのですか」(363)と、アイザックには予想外の観点から批判する。ロスの女の告発と批判に対してアイザックは沈黙したままである。

それでも、二人の間に意思の疎通がないわけではない。アイザックは女の子に角笛を渡し、女もそれを受け取るのである。この角笛は単なる「物質的な贈り物」⁽¹³⁾としてロスが女に渡そうとした金と同一視できるものではない。角笛は女の息子にとって現実的には役に立つものではないし、そのことを女も理解しているだろう。それでも受け取ったことは、アイザックがロスの女の息子に継承してもらいたいものがあることを女は理解したからではないだろうか。ほとんど私物を持たないアイザックが唯一持ち続けてきた角笛を、エドモンズ家の人間やピーチャンプ家の人間ではなく、その二つの血を引く人物に託したことは意味深いものがある。その息子が長じて、角笛を渡され、角笛に纏わる話を聞くことがあるとすれば、マッキヤスリン農園の悪と恥辱だけでなく、荒野という異界に生起した物語を聞くことにもなる。

その時には消え去ったもの、消え去りつつあるもの、あるいは消え去ることなく存在しているものが、新たな装いを持って受け止められることであろう。「おそらく千年後、あるいは二千年後のアメリカでは。だが、今は駄目だ。今は駄目なのだ」(361) と、南部では黒人と白人が対等ではないことを知悉しているアイザックは未来に希望を託すのである。

台帳に記載されている年代記が南部の縮図であったように、角笛は荒野を想起させるものとなろう。年代記を南部の縮図と読み込む者としてアイザックが想定されたように、角笛に荒野における物語を読み込む者としてロスの子供は想定されている。同様に、『行け、モーセ』において、モリー叔母が孫のサミュエル・ワーシャム・ビーチャンプの遺体をシカゴから南部に連れ戻すとともに、その顛末を新聞記事にすることを執拗に求めたことの意味も理解できるのである。記事を読む人の中に、サミュエルがシカゴまで行かざるを得なかったのはロス・エドモンズがエジプトで売ったからだ、というモリーの思いを読み込む者が現れることが期待されるのである。「黒衣の道化師」で、新婚の妻マリーを喪ったライダーの言葉にならない悲しみを共感をもって受け止めたテンプルのように。⁽¹⁴⁾

(注)

- 1) John T. Matthews, *The Play of Faulkner's Language*, (Cornell University Press, 1982), p. 213.
- 2) Matthews, p.220.
- 3) William Faulkner, *Go Down, Moses* (Random House, 1942), p. 20. {本文中の引用は大橋健三郎訳『行け、モーセ』(富山房、1973年)を参考にした。}
- 4) Matthews, p. 224.
- 5) Arthur F. Kinney, *Go Down, Moses: The Miscegenation of Time* (Twayne Publishes, 1996), p. 132.
- 6) Matthews, p. 230.
- 7) Eric J. Sundquist, *Faulkner: The House Divided* (Johns Hopkins University Press, 1983) p. 137.
- 8) Judith Bryant Wittenberg, "Go Down, Moses and the Discourse of Environmentalism" in Linda Wagner-Martin ed., *New Essays on Go Down, Moses* (Cambridge University Press, 1996) p. 61.
- 9) 「このロス・エドモンズの祖父である老キャス・エドモンズが彼(アイザック)をだまして世襲財産を放棄させたのだ」(36) というルーカスの認識が代表的な

ものである。

- 10) ユーニスの矜持に関連して、「火と暖炉」で「自分では使いきれないほどの金を銀行に持っている」(33) ルーカスが土の中から手にした一枚の金貨から、それこそ寝食を忘れて埋められているはずの金を探し出そうとするのは、その金が「百年以上前にバックとバディが埋めた金」(49) であり、老キャロザーズの血を引くルーカスがマッキヤスリン家の一員であるという自己主張、もしくはその正当な受取人であるという自負の念からではないのか。
- 11) 土地の放棄についてケアリー・ウォールは「彼（アイク・マッキヤスリン）は単純に、土地と金をジェイムズ、フォンシバ、そしてルーカス・ビーチャンプに与え、彼らに農場を経営させて、経済的に豊かにさせればいいではないか」と、トニ・モリスンの『ソロモンの歌』のアナロジーとして提言している。アイザックの悲哀を理解していないだけでなく、経済的繁栄が幸福の条件であるとするまったく的外れの提言である。(Carey Wall, "Go, Down Moses: The Collective Action of Redress" *The Faulkner Journal*, VII: 1&2 (Fall 1991 / Spring 19929): 166.
- 12) Sundquist, p.135.
- 13) Kinney, p. 6.
- 14) William Faulkner, *Requiem for a Nun* (Random House, 1951) p.198.